

「お前にひとつ白状しなければならないことがあるんだ」とイワンはまた話をきりだした。「自分に身近な人間をどうして愛せるのか、それが僕にはどうしてもわからないんだ。僕の考えじゃ、**近い者だと愛することができない、愛せる相手は遠い者にかぎる**と思うね。僕はいつかなにかでこういう『情けぶかいヨアン』（そういうある聖者）の話を読んだことがあるが、それは、その聖者のところへある飢えごえた男がやって来て、自分を暖めてくれと頼んだところが、聖者はいっしょに寝床にはいって、その男をだいてやって、あるおそろしい病気のために腐りかけていやな臭いのする相手の口に息を吹きかけはじめたという話なんだ。が、僕はこう信じているね、その聖者がそんなことをしたのは、一時の突発的な感情にかられたのだ、偽りの突発的感情にかられたのだ、**義務感に命ぜられた愛のためだ、自分に課した宗教的懲罰のためにちがいない**というふうな。人間を愛するためには、その人間に姿を見せないでいてもらわなければならない、その人間がちょっとでも顔を見せたが最後、愛は消えてしまうんだ」

「ついでに話すかね、僕は最近モスクワであるブルガリヤ人からこういう話を聞いたんだ」とイワンは、弟の言うことなど耳にはいらぬような様子で話をつづけた。「あの国、つまりブルガリヤではトルコ人やチェルケス人がスラヴ人の反乱を恐れて、いたるところで暴虐のかぎりをつくしているんだってさ——つまり家を焼いたり、人を斬りころしたり、女子供に暴行を加えたり、**囚人の耳を塙に釘づけにしたまま翌朝までほうったらかしておいて、朝方絞首刑に処したり**等々、あらゆる想像を絶するようなことをしているんだって。

イワンの叙事詩『大審問官』 わし：老大審問官 90 歳、お前：キリスト、彼：悪魔、彼ら：信徒？

お前がもしこの『パン』を与えることを引き受けたとすれば、お前は個々人およびぜんぶをひっくるめた人類共通の、かつ永遠につづく人間的なやみに解答を与えることになったはずだ——『だれに跪拝すべきか？』というなやみにな。人間にとって、身は自由でありながら、できるだけはやく跪拝すべき相手をさがし出そうということほど絶えまない苦しい心配はないのだ。しかし人間は、議論の余地なく跪拝できる相手を、議論の余地なくだれもが一斉に跪拝することに賛成できる対象をさがし求めている。なぜなら、これらあわれな人間どもの心労は、単に、それぞれ自分が跪拝すべき相手をさがし出すことだけにあるのではなくて、だれもが信じ、かつ跪拝し、しかもぜひともみんないっしょにそうすることのできるような対象をさがし出すということにあるからなのだ。この、**みんないっしょに跪拝したいという欲求**こそ、世のはじめからつづいておる人間個々人および人類ぜんたいの最大のなやみなのだ。

跪拝： ひざまずいて礼拝すること

この世には、あの意気地のない謀反人どもを幸福にしてやるために
彼らの良心を永久に征服しとりこにすることのできる力が三つある、たった三つだけある、——
その三つの力とは、**奇蹟と神秘とそれに権威**だ。

なぜなら、この**全世界をひとつに結合したいという欲求**こそ人間の第三の最後のな
やみだからだ。人類は全体としてつねに、ぜひとも全世界的な組織をつくろうと努めてきた。偉
大な歴史をもつ偉大な民族は数多いが、それらの民族は高い位置にのぼればのぼるほど、不幸に
もなった、というのは、人類を全世界的に結合したいという欲求を他の民族よりも強く意識する
ようになるからだ。偉大な征服者のチムールやジンギスカンは旋風のように地上を疾駆して全世
界を劫略しようとしたが、彼らでさえ、たとえ無意識ではあったにせよ、全世界を共通のひとつ
のものに統一したいという人類のおなじ偉大な欲求を表現したものなのだ。

なるほど、われわれは彼らを働かせはするが、労働から解
放されているときは、彼らに、子供の遊びのように、子供じみた歌や合唱や罪のない踊りなどを
楽しむ暮らしをさせてやる。そうだ、われわれは彼らに罪も許してやろう、彼らはよわい無力な
連中だから、われわれが彼らに罪をおかすことも許してやれば、子供のようにわれわれになつく
にちがいない。われわれは彼らに、**われわれの許可を得て行なえば、どんな罪でもあがなわれる
と教えてやる**つもりだ。彼らに罪をおかすことを許してやるのは彼らを愛しているからだ。そし
てその**罪の報いは、当然のことながら、われわれが引き受けてやる**。こうして引き受けてやれ
ば、彼らはわれわれを神にたいする自分たちの罪を肩代わりしてくれた恩人として崇めるに相違
ない。そして彼らはわれわれにまったく秘密をもたなくなるだろう。われわれは彼らに妻と情婦
をもつことも、子供を持つことも、持たないことも——すべて彼らの服従の程度に応じて——許
したり禁じたりする、——そうすれば彼らは愉快地嬉々としてわれわれに服従するはずだ。この
上なく苦しい良心の秘密ななやみも、——なにもかもすべて彼らはわれわれのもとに持ちこむか
ら、**われわれはそれをのこらず解決してやる**、そうすれば彼らは喜んでわれわれの解決を信ずる
にちがいない、なぜなら、信ずれば彼らは大きな心配事から解放され、いまのように自分で自由
に解決しなければならないというおそろしい苦しみからまぬがられるからだ。こうしてだれも
が幸福になれるわけだ。彼らは支配する数十万の者をのぞく数百万の者がのこらず。つまり、わ
れわれだけは、**秘密を保持するわれわれだけは不幸でいなければならない**のだ。こうして何十億
という幸福なおさな子と、善悪の識別というのろいを負った数十万の受難者ができるわけだ。

ギリシャ正教

(略) エジプトのマリヤの生涯でも読んで聞かせれば——それらのや
さしい物語で民衆の心を刺しつらぬくこともできよう、しかも週にせいぜいわずか一時間、収入
がすくないことなど意に介せず、一時間だけ費やせばよいのだ。そうすれば、わが国の民衆がい

かに情があつく、感謝の念がつよく、百倍にもして恩を返すものであるかが自分にもわかるだろう。彼らは司祭の熱意とその感動的な言葉を心にとどめて、進んで司祭の畑仕事も家事も手つだってくれようし、司祭にたいして前よりも尊敬を払うようにもなるだろう、——そうすればもう司祭の収入は増すばかりだ。

人はある種の考えに遭遇し、とくに人々の悪業などを目にしたような場合に、疑惑におちいつて、こう自問することがある。『この人を力づくで捕えるべきだろうか、それとも謙虚な愛で捕えるべきだろうか?』と。そういう場合はつねに、『謙虚な愛で捕えよう』と、そう決めるがよい。ひとたびそう決心すれば、全世界を征服することもできるのだ。謙虚な愛はおそろしい力であって、あらゆる力のなかで最もつよく、これに匹敵するものはなにひとつない。毎日毎時毎分、自分の同国やうしろをふり返り見ながらあゆんで、自分の姿が立派であるように心がけねばならぬ。いまお前が小さな子供のそばを通るとき、意地悪そうな顔をし、心に怒りをいだし、口ぎたない言葉を吐いたとすれば、お前のほうは子供に気づかなかったかもしれないが、子供のほうはお前を見て、お前のみにくい不信心な姿が防ぐ力をもたぬ子供の心にながく焼きつけられないともかぎらない。お前は知らないだろうが、もしかすると、そのことですでに子供の心に悪い種を投げこんだことになるかもしれないのだ、そしてあるいはそれが生きていくかもしれないのだが、それというのもみんな、お前が子供にたいして不注意だったからであり、自分の心のなかに慎重な実行的な愛を育てなかったからである。

——よくわからない主張

人は何人の審判者にもなれないということをとくに銘記すべきである。なぜなら、その審判者自身が、自分もいま目の前に立っている人間とまったくおなじような罪びとだ、ことによると、自分の前に立っている人間の罪にたいして自分は何れよりも責任があるのかもしれないと認めないかぎり、この地上には罪人の審判者など存在しえないからである。それを悟ったとき、はじめて審判者になれるわけである。これはどんなにばかげたことのように見えようとも、真理なのだ。なぜなら、自分がほんとうに正しい人間だったならば、いま自分の目の前に立っている犯罪者など存在しなかったかもしれないからだ。

——よくわからない主張

それなのに、この町でこの小娘の生い立ちを知る者はすくなく、知っていたとしても、どれもこれもあやふやだった。最近でさえそれ以上のことはだれも知らず、すでにずいぶん大勢の者が、四年間に『絶世の美人』へと変貌をとげたアグラフェーナに関心を持ちだした昨今でさえそうなのである。ただ、まだ十七歳の小娘の頃、だれか、どこかの将校だとかいう男にだまされたあげくすぐそのあとで棄てられたという噂があったくらいのものである。将校はよそへ引きはらって、その後どこかで結婚し、グルーシュンカは恥辱と貧窮のなかにとりのこされたのだという。もともと、人の話だと、グルーシュンカが老人に貧窮のどん底から救いだされたこと

は事実だが、家庭はれっきとしたもので、なにか聖職の出だとかいい、ある無所属の助祭かなにかの娘だということだった。こうしてこの四年のあいだに、このひどい目にあわされた、感じやすいあわれな身なし子が血色のいいむっちりしたロンヤ美人に一変し、大胆でてきぽきした気性の、気位が高くて押しのつよい女に、金銭に明るい、しまりやで用心ぶかい女、手段の正不正は別として、人の噂ではすでにまんまとひと財産きずきあげてしまった、金儲けのうまい女になりかわっていた。ただひとつだれもがこれだけはまちがいないと思っていることがあった。それは、グルーシユンカが難攻不落で、この四年間に、彼女の旦那である老人以外に、彼女の寵愛を得たと自慢できるような男はまだひとりもないということであった。これは確かな事実である、というのは、この寵愛を得ようと思って飛びだしてきた好き者は、とりわけここ二年間、けっしてすくなくなかったはずなのに、そういう試みはことごとく水泡に帰し、求愛者のなかには、この気性のしっかりしたわかい女の断固たる嘲笑まじりの拒絶にあって、滑稽で恥さらしな結末さえ見せて引きさがらざるをえなかった者もいたくらいだったからである。

ドミートリイは街道を飛ばした。モータロエまでは**二十キロ**あまりあったが、アンドレイのトロイカの走らせ方なら、**一時間と十五分**くらいで行きつけそうだった。その疾駆、ト、ミーチャは急に気分が爽快になったような感じがした。大気はさわやかですずしく、澄んだ空には大きな星がいくつも輝いていた。